



書評

[評者]

佐田 竜一

天理よろづ相談所病院 総合診療教育部

ジェネラリストが知りたい 膠原病のホントのところ

竹之内 盛志・萩野 昇 著

●A5 頁244 2021年11月
定価：3,960円(本体3,600円+税10%)
[ISBN978-4-8157-3035-2] MEDSI 刊



時は2022年である。医学知識はkeywordを拾い上げれば、googleを介して大抵のことを検索できる。もう少し系統だった網羅的知識を得たければ、UpToDate®やDynaMed®などの二次文献ツールを使えばよい。最近は多くの日本人医師が、自分の知識を整理したサイトを作ってくれている。さらに、Antaa SlideやMediiなどの双方向性のサイトから、困ったことを専門医に相談できる窓口すらある。

私はもう医師18年目のロートル医師だが、自身の研修医時代と比べ、医学知識のaccessibilityは格段に上がった、はずである。にもかかわらず、膠原病診療は今なお複雑で、苦手意識をもつ医師が多い。膠原病診療がいまだに難しい理由は明確で、以下3点が挙がる。

- ・病変が多臓器にわたるため鑑別疾患が多い
- ・何か1つの検査のみで診断がつけられるわけでもない
- ・そもそも診断基準がない(すべて分類基準である)

この解決策として知識量を増やすことは必須である。しかし、その使い方を知らなければ、知識は単なる無駄である。clinician-educatorの最も重要な課題は、学習者に診療方略を伝え、膨大な知識を使える状態にセットすることである。

本書は亀田総合病院の総合内科後期研修を経て帝京ちば医療センターでリウマチ・膠原病診療の研鑽を積まれた竹之内 盛志先生と、その師匠である萩野 昇先生の対話形式の書籍である。この本を拝読して、教育者としての「言語化の大切さ」を強く感じた。互いの芳醇な知識をぶつけ合って構築した文章から察するに、本書には帝京大学ちば総合医療センター(帝京ちば)で毎日繰

り広げられている膨大な量の指導のエッセンスが詰まっている。clinician-educatorとして、こういう内容をベッドサイドで伝えられればなあ、と思うことばかりが詰まっている。

とにかくこの本を手にとったら、「総論」に目を通してほしい。膠原病診療のスタイルが、そこに明確に言語化されている。また、人生で一度でもステロイドを処方したことがある医師は、「ステロイドの使い方」の項を読み、ステロイドという劇薬の使い方について今一度振り返っていただきたい。その後、「症状」「検査」「コモンな疾患」の項で繰り広げられる、帝京ちばで毎日繰り広げられているであろう教育の一端をゆっくり味わうのがお勧めである。

萩野 昇先生は、この濃密な本をして「門前書」と定義しているが、実際この本は「膠原病のことをあまり知らないから学びたい」という医師には適さない。厳しい言い方をすれば、その医師はまだ門の前にすら立っていない。しかし、「膠原病の診断やマネジメントに悩んだことがある(苦汁を嘗めたことすらある)」医師には極めて有用な本である。膠原病診療という壮大な鉄門の前に本書を開くと、自分の診療の道が開けたように感じられるだろう。

この本は、膠原病の診療方略を「学習」できる本である。学習科学の研究者であるJan De Houwerの言葉を借りるなら、「学習」とは、学ぶことで自己の行動を変えることを意味する¹⁾。この本は、膠原病診療の行動を変化させられる本であるといえよう。

●文献

- 1) Houwer JD, et al : What is learning? On the nature and merits of a functional definition of learning. Psychon Bull Rev 20 : 631-642, 2013